

米国短期研修プログラムの教育的効果の考察 —現地での活動の省察レポートの分析を通じて—

稲葉 みどり

(愛知教育大学日本語教育講座)

An Analysis of the Reflection Reports to Explore How the Short Stay Abroad Program Illuminates the Participants

(Midori INABA)

(Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education)

要約 本稿では2015年2月に実施した約2週間の短期海外研修プログラムの概要、及び、教育的効果を考察する。このプログラムは、研修生が米国の大学を訪問し、日本紹介のプレゼンテーション、現地学生とのディスカッション、授業見学、現地大学院生との意見交換会、大学の施設見学等を行うことで、情報・思想を発信する力、異文化間コミュニケーション力、英語運用力等の育成を図ると共に、両国の大学生の考え方の違いや米国の大学の授業・大学生活・サークル活動等の様子を知ること等を目的として実施された。事前準備から現地研修、事後研修、省察レポート作成、報告会までの一連の過程をプログラム全体と考え、研修生は教員の指導の下に自律的に準備を進めた。そして、省察レポートの記述を分析した結果、研修生は日本独自の文化を再認識し、聞き手を取り込むプレゼンテーションの重要性を学び、グループ・ディスカッションでは異文化コミュニケーションを体験し、現地の大学の授業の様子や学習姿勢に関する理解を深め、自分から発信すれば聞き手の反応から多くのことを学べることを学んだことが明らかになった。この短期研修だけで発信力や英語運用力が特段高まったとは言えないが、異文化体験を通じて、海外の文化への興味・関心を高め、コミュニケーションの方法や価値観の相違等に関する様々な気づきを促したという点では成果があったのではないかと考えられる。

Keywords: 海外短期派遣、プレゼンテーション、グローバル人材育成、発信力、異文化体験

1. はじめに

本稿では、2014年度に実施した米国の大学への海外短期派遣プログラムの目的、研修内容、実施状況等を振り返り、その教育的意義や成果を明らかにすることを目的とする。本プログラムはグローバル人材を育成する方策の1つとして、大学生を海外に短期派遣し、研修を行うものである。筆者は2015年2月下旬より米国インディアナ州パデュー大学言語文化学科(School of Languages and Cultures)へ6名の学生を派遣し、約1週間(社会見学研修を含めて約2週間)の研修を実施した。以下では、プログラムの概要、目的、目標等について述べ、実践報告をすると共に、事後に実施した反省会での所感、省察レポートの記述を基に、プログラムの教育的効果や課題について考察する。なお、本研修は2014年度海外短期派遣プログラムの「米国パデュー大学への短期派遣(代表者:稲葉みどり)」として愛知教育大学より助成を受けている。

2. プログラムの概要

2.1 目的

このプログラムは、米国の大学を訪問し、5つの主

な活動(プレゼンテーション・ディスカッション・授業参観・大学院生による助言・大学の施設見学等)を通じて、情報や思想を発信する力の育成を目的として実施した。プレゼンテーションでは、派遣先(以下、現地)大学の学生への日本文化や社会等の紹介を計画した。また、現地の学生とのディスカッションの場を設け、質疑応答や意見交換を通じて、両国の大学生の考え方の違い等を学ぶことをめざした。大学の授業参観を行い、米国の大学生の学ぶ様子を観察する機会も設けた。さらに、現地の大学院生による研修生への助言の会も開催した。この他、キャンパスの施設見学、学生のスポーツ試合の観戦、学生サークル上演のミュージカルの観劇等をプログラムに盛り込み、勉強以外の活動や大学生活の様子を知る機会とした。

参加した研修生は、海外渡航経験が少なく、渡米は大半が初めてであることから、米国の大学や文化を体験するための入門編の企画を立てた。研修は予め両大学の教員間で連絡をとり、綿密な計画の上作成した。

2.2 研修活動の内容と主旨

プレゼンテーションは、日本発信をテーマとし、日

本文化、社会、教育、大学生生活等を紹介する内容で、英語と日本語の両方でできるように準備した。目標は日本のことを世界に発信する力をつけること、英語で発表する力をつけること、さらに日本語で分かりやすく説明する力をつけることである。日本語を学ぶ大学生と分かりやすい日本語を用いてコミュニケーションする力もグローバル人材の大切な資質・能力と考えているからである。プレゼンテーションを取り入れた理由は、予め準備でき、話題を発表者が提供することで質疑応答や交流をしやすくするためである。

次に、ディスカッションでは、英語で情報を伝える力、意見を述べる力、相手の言うことを理解する力等の育成をめざした。いきなり討論するのは難しいので、現地の学生が研修生にインタビューをするという設定をした。予め現地学生からインタビューの質問が送られ、研修生はその質問に対する回答を準備した。そして、質疑応答をディスカッションに発展させる計画を立てた。この活動では英語コミュニケーション力を高めるとともに、交流を通じて現地の学生の様々な考え方をすることを目標とした。

大学の授業見学では、米国の大学の授業の進め方、学生の態度、教室の様子等を知ることが目標とした。パデュー大学言語文化学科では、日本文化や日本社会等に興味を持ち、日本語を学ぶ学生が多くおり、日本語や日本文化・社会に関する授業が多く開講されている。今回はその授業を参観し、外国語教育がどのように行われているかを知る機会を設けた。

現地の大学院生による研修生への助言の会では、研修生が英語でプレゼンテーションを行い、それについて大学院生が助言し、フィードバックすることを目的とした。大学院生は研修生がプレゼンテーションを行う授業担当者 (TA) に含まれるので、適確な意見やコメントがもらえることを期待した。この他、大学の施設、サークル活動等の見学を通して、学生生活、図書館、福利施設等の事情を知る機会とした。

研修全体では、米国の大学に関する知識・情報を得ること、日本 (自己のもの) とは異なる文化に直に触れ、差異を理解すること、自文化・自国文化を中心とした思考から脱却し、多様な文化の存在を承認すること、言語や文化的背景の異なる人と実際に意見交換をする等を目指した。

2.3 海外留学・研修の効果に関する研究

海外研修の教育的効果に関しては、多くの先行研究 (稲葉 2005, 中川 2009, 池田 2011, 柿本 2011, 河合 2011, 田中 2011, 友岡 2011, 松本 2011 等) があり、その多くは外国語運用能力の向上、異文化間コミュニケーションの体験、自国や滞在国のイメージの変化等を指摘している。例えば、松尾(2011)は、米国シリコンバレーでの院生を対象とした 4 週間の英語研

修プログラムを通して、参加者は世界で活躍する革新的な研究者としてのマインドはどうあるべきかを認識し、様々な研究分野の幅広い知識と理解の必要性を肌で感じ、イノベーションの大切さを体験することができたと述べている。また同学部生を対象とした研修では、英語を話すことの壁が取れ、気楽に話せるようになったのが大きな成果であるとしている。さらに、自分の意見をしっかり持ち、はっきり表現することの重要性、日本人であることのすばらしさ、国際的に生きるには何か、人種・年齢・性別に関係なく何ができるかが一番大切であることに気づいたという参加者の感想を報告している。

木村(2011)は、短期海外研修プログラムの効果を語学面と情意面から検証している。語学面では、リスニング力の向上、語順の意識が高まり、ライティングでは、「正確さ」は向上しなかったが、「流暢さ」は向上したとし、3 週間では文法面や語彙面での正確度を統計的に有意に向上させるには至らなかったことを報告している。すなわち、一番期待されないのが語学力の向上であると思われたが、英検準 2 級レベルの低習熟度の学習者においては、英語力の向上に部分的ではあるが効果がみられたという結果である。また、情意面では、自律的な学習態度を身につけ、積極的になることを検証している。その結果、外国人と話すことに抵抗感がなくなった、他国の文化に興味を持った、日本の文化を見直したという主旨の感想が見られ、英語力の向上のみならず、視野を広げるきっかけとなったと述べている。

山口(2011:5)は、ICU の長期留学の役割や効果について、帰国者から「留学先で国際情勢を頻繁に意識するようになり、世界のことを知ると同時に日本を知ってもらおうと思うようになった／留学に必要なのは自分で課題と解決策を発見して行動する力・異なる視点から分析する力・固定観念にとらわれない考え方・様々な状況に対応する力が必要である／人とのつながりにより精神的に成長できた」という主旨の感想を得たことを提示している。

工藤(2009)は、オーストラリア 4 週間の短期語学研修の教育的効果について、「学習言語でのコミュニケーション困難」などの否定的側面にも着目し、それを克服するための「困難の緩衝行動」(例：他の研修生との情報交換、周囲の人との親密化)を通して学習言語を使うことが研修前よりも身近で自然になるなどの「研修成果」が現れると述べている。また、それまでに日常とは異なる空間での学習や異文化との出会いを通じて、他者を偏見やステレオタイプのような集団的イメージではなく、1 人の人として見られるようになる事例を紹介し、研修を通して物事の「新解釈」や「再解釈」が生まれると主張している。

さらに、工藤(2011)では、教育的効果を肯定的な側

面と否定的な側面から考察し、質の向上のための提言をしている。その大筋は、引率者と現地スタッフによるガイダンスの下で学生が内省しながら自ら教育的効果をつくる自律型研修プログラムの構築、事前研修から自律学習を促進する支援体制の整備、教育的効果を適正に判断する評価法の開発、短期海外研修プログラムの大学カリキュラムの中での位置づけの検討、キャリア形成への活用の工夫等の必要性である。

本稿では、これらの知見を基に研修生の省察レポートを分析し、その教育的効果を探る。

3. 研修の概要

3.1 全体の流れ

参加者は学部1年生1名(現代学芸課程日本語教育コース;N1¹)、2年生1名(法学部法律学科²;L2)、3年生3名(現代学芸課程国際文化コース;K3a; K3b; K3c)、4年生1名(中等教育教員養成課程社会専攻; S4)、大学院修士課程1年1名(英語教育専攻; M1)の7名、及び、引率教員1名(日本語教育講座;筆者)である。プログラムは、事前準備、現地での実践、事後研修、報告会で構成され、全ての過程を研修と考え、(1)立案、(2)準備、(3)実践、(4)省察、(5)報告を基軸に、以下の手順で研修を進めた。

まず、プレゼンテーションの内容を立案した。現地の学生が興味を持ちそうなテーマを選び、研修生各自がプレゼンテーションを2~3本作成した。その後発表会を開催し、教師や有志学生からコメントや助言をもらい、改訂した。リハーサル会で発表練習をし、更に改訂を加えた。研修会は研修生が主体となって自律的に進めた。【図1】【図2】は研修会の様子である。



【図1】研修会の様子：コメント・助言



【図2】研修会の様子：発表練習

次に、自己紹介とプレゼンテーションに関するポスター(【図3】)を派遣先大学に送り、発表内容を紹介した。さらに、予告編として、プロモーションビデオを作成しYouTubeにアップし、派遣先大学の学生や関係者が閲覧できるようにした。この間、派遣先大学の学生よりディスカッションで取り上げるテーマや質問が送られてきたので、それに対する回答を考えた。その他、旅行準備、現地情報収集、諸注意等を行った。



【図3】ポスター (例)

現地の大学での研修は、2015年2月下旬から約1週間の日程で実施した。³全ての活動等終了後、現地ホテルにて研修レポートの作成とリフレクション(省察)を行った。帰国後、全学向けの報告会で研修内容と成果を公表した。【表1】はスケジュール概略である。

【表1】スケジュール概略

時期	主な研修内容
2014年10月中旬~下旬	プレゼンテーションの立案 実施計画作成
2014年11月	プレゼンテーション作成 発表練習
2014年12月	自己紹介ポスター作成 現地大学との調整
2015年1月	プロモーションビデオ作成 リハーサル・検討会

	ディスカッション準備 旅行の準備・情報収集 ガイドンス・しおり等作成
2015年2月 上旬	
2015年2月 下旬	2015年2月23日～3月2日迄 パデュー大学滞在 活動と実践
2015年3月 初旬	リフレクション（於現地ホテル） 省察レポート作成
2015年4月 中旬	平成26年度海外短期交流プロ グラム報告会（2015/4/15） 研修生による発表

3. 2 派遣先大学での活動

(1) 日本紹介プレゼンテーション

現地の大学生を対象に日本・日本文化紹介のプレゼンテーションを行った。発表時間は7分、質疑応答3分、合計10分の企画を各自2本～3本用意した。【表2】はプレゼンテーションの主なテーマである。

プレゼンテーションは、英語と日本語のどちらでもできるように準備した。プレゼンテーションの方法は日本語レベル等を鑑み、担当教員の指示に従った。日本語と英語両方でやってほしいという希望もあった。全体で30回の発表を実施した。【図4】【図5】【図6】は、プレゼンテーションの様子である。

【表2】プレゼンテーションのテーマ

	テーマのキーワード
1	ロボット／浮世絵と木版画の技法 [M1]
2	自動車学校／大学生の1日／サークル [S4]
3	着物・浴衣／弁当の作り方／駄菓子 [K3a]
4	弁当文化／キャラ弁／日本の方言 [K3b]
5	日本の正月／おせち料理／カラオケ [K3c]
6	日本の四季／伝統行事／サークル活動 [N1]
7	年齢によるお祝い／成人式／学校規則 [L2]
8	愛知教育大学の紹介／日本語教育の紹介 [引率教員担当]



【図4】大学生の一日（日本の朝食の紹介）



【図5】日本の正月（おせち料理の紹介）



【図6】日本の四季（夏の風物と風鈴の紹介）

(2) グループ・ディスカッション

現地の大学生が研修生にインタビューを行い、それについてディスカッションを行った。質問は予め研修生に送られてきた。研修生2名と質問した学生4～5名が1グループとなり、4グループに分かれて活動

（【図7】）が進められた。研修生は自分のグループからの質問の回答を考えてディスカッションに臨んだ。日本の文化と社会という授業なので、難しい質問も含まれており、研修生同士で全ての質問について考え、当日に備えた。質問の一部は資料に示した。



【図7】グループ・ディスカッションの授業

(3) 授業見学

主に日本文化・社会について学ぶコース、日本語コースの授業を見学した。プレゼンテーションをしたのと同じクラスが殆どであった。文法、ドリル、読解等のクラスがあり、課題発表なども行われていた。研修全体で28回の授業見学をした。

(4) 大学院生による助言

プレゼンテーションの中には、現地の大学院生からコメントをもらう機会が設けられた。研修生がプレゼンテーションを行い、それについて様々な角度からの助言が行われた。

(5) 大学の施設見学等

授業の空き時間、週末を利用して学内の施設を見学した。講義室、図書館、学生福祉施設、ノーベル賞受賞者の記念館、飛行場、スタジアム、劇場等である。学生によるミュージカル公演の観劇、バスケットボールの試合の観戦等も行った。

4. 研修生の自己評価から見た効果の考察

4. 1 プレゼンテーションの省察

ここでは省察レポートを基に研修生がどのようなことを学び、気づいたこと等を探る。まず、プレゼンテーションによって研修生が学んだことを見る。以下の(4.1)(4.2)では日本について目を向けるきっかけとなったことが記述されている。

(4.1) プレゼンを作るにあたって、自分自身が日本について知ることができた。[L2]

(4.2) 日本にいと日本の文化が身近にありすぎて、あまり意識することがなかったが、改めて日本独自の文化に目を向けるきっかけとなった。[S4]

また、以下の(4.3)(4.4)では、現地の学生の質問等から、米国の大学の学生の視点から見た日本について知ることができたことが分かる。

(4.3) 外国人の目線で日本がどのようにとらえられているのかを考えるよい機会であった。[L2]

(4.4) 意外に知らないだろうと思っていたことを知っている人が多かった。学生の反応で、改めて日本の認知度を知ることができた。[K3c]

(4.5) では日本について自分自身をもっと知る必要があると感じたことが記述されている。

(4.5) 質問は面白く、日本語でも答えるのが難しいものもいくつもあった。米国で日本語を勉強しているからこそ、得られる視点や観点からの質問はとても貴重なものとなった。自分自身が、日本についてより知らなければならぬと感じさせられた。[M1]

(4.6) は、日本文化の良さを認識するきっかけとなったとしている。

(4.6) 改めて日本の文化・良さを認識し、学生たちの反応・質問を通して今まで気にしていなかった

部分に気づくことができた。自分の国について違う視点で見られるいい機会だった。[K3b]

(4.7) のように、米国の大学生生活との違いを感じた者もいる。

(4.7) 学生の質問、反応によって、日本の学生生活と、米国の学生生活との違いを学ぶことができた。初めて日本についての外からの視点をみることができ、貴重な経験となった。[S4]

(4.8) からは、初めてのプレゼンテーションで、英語に自信がなく、緊張、不安、葛藤があったことがうかがえる。

(4.8) もともと人前で話すのがあまり得意ではないことに加えて、英語で、しかも米国の学生の前でプレゼンテーションをするということで、教育実習の研究授業と同じくらい緊張した。[S4]

しかし、「どのクラスでも真剣に聞いてもらえて嬉しかった[M1]」「質問してくれるのは興味を持ってくれたということ[S4]」「予想外のところで笑うのは新鮮だった[K3c]」等、実際にやってみると現地の学生の反応が暖かく、緊張が和らいで克服できたようである。

この他、現地の学生の反応に関する感想は多く見られた。例えば「米国人はにこにこ聞くというよりは、真剣に聞く感じで、素直な反応が良くも悪くも返ってきた[M1]」と聞き方の違いに気づいた者もいる。(4.9) のように、現地の学生の反応が意欲的行動に繋がったとする記述も見られた。

(4.9) とても緊張したが、興味を持って聞いてくれたのでこちらも頑張って伝えようと思った。[S4]

(4.10) では、現地の学生の反応から学んだ具体的な事例を挙げている。

(4.10) 学生たちの反応から伝わるものが多くあった。日本にとっても興味を持っているということ。普段私が当然だと思っていることも、異文化の学生たちにとってはおもしろいということ。日本文化、特にアニメや食文化については、すでに海外にも浸透しているということ。[K3c]

これらから分かったことは、現地の学生の反応から研修生が様々なこと学んだと言うことである。

日本語で行ったプレゼンテーションは事前に日本語レベルや日本に関する知識の度合いが十分に把握できていなかったため、(4.11)のような反省も見られた。

- (4.11) どの程度日本語や日本文化を知っているのかわらずに準備したので、学生のレベルに合わせて用意すればよかった。[M1]

また、発表したクラスの現地の学生は日本語を勉強しており、日本や日本語にとっても興味を持っていたので、英語で準備をしてきたプレゼンだが、日本語と英語の両方で行ったこともあった。よって、(4.12)(4.13)のような戸惑いもあったようである。

- (4.12) 英語でやるつもりだったが急遽日本語になったりしたのに戸惑った。[K3c]
(4.13) 日本語を勉強しているので日本語で返したほうがいいのか、英語のほうがいいのか分からなかった。[K3c]

コミュニケーションに関しては「ちゃんと伝わったかどうか分からなかった[K3c]」「英語をもっと練習をすればよかった[K3c]」「英語のネイティブチェックをするべきだった[L2]」等の反省も見られ、英語の練習等が十分でなかったことが挙げられた。

さらに、大きな反省点として、発表はできたが、一方的になってしまい、その後のディスカッションになかなか到達しなかったということが研修生から挙げられた。質疑応答に留まることが多く、聞き手とのインタラクションの機会が少なかったという以下(4.14)～(4.18)のような反省である。

- (4.14) 質問に答えられず、発表後の会話が不十分だった。[K3c]
(4.15) 学生と会話したり、関わったりすることがなかなかできなかった。聞き取りが苦手で、聞き取れた単語から推測して答えていたが、合っているか不安で積極的にできなかった。[K3b]
(4.16) 会話、交流ができなかったため、スライドを修正したが、少ししか改善できなかった。[K3a]
(4.17) もう少しプレゼンした後の会話や学生との交流がしたかった。[N1]
(4.18) 始めのうちは緊張して一方的なプレゼンテーションになってしまったが、慣れてくると質問を投げかけるなど、学生と関わり合いながらプレゼンテーションをすることができた。[M1]

4.2 ディスカッションの省察

次にディスカッションに関する省察を見てみる。まず、英語によるコミュニケーションに関しては、質問の回答を準備していったにもかかわらず、簡単ではなかったようである。例えば、(4.19)のような聞き取りである。

- (4.19) 聞き取れない部分も多く、意見を英語で言うのもとても難しかった。[K3b]

以下の(4.20)(4.21)のように、話すこともその場で対応しなければならず、苦労したようである。

- (4.20) 会話は、辞書を見たり、文構造を考えたりする間もなく、聞かれたことにすぐに答えなければならず、言いたいことが英語にできない、英語にしても意図が思うように伝わっていないということが何度もあった。[S4]
(4.21) 英語だとしてどう思われているのか心配で、自信もなかったため、恥じらいを捨ててもっと積極的にコミュニケーションできたらよかった。[S4]

しかし、「たとえ英語ができなくても、相手に興味を持ち、恥ずかしがらずに、とにかく伝えようとする積極的な姿勢が大切だということを感じた[S4]」というように、自分から話していく姿勢の必要性を認識したと考えられる。また、「一つの質問から意見がどんどん広がるのが日本でのディスカッションとは少し違う。積極的に自分の意見をもっと言おうと思った[K3b]」という感想も見られた。以下の(4.22)(4.23)はディスカッションの総合的な評価である。

- (4.22) 今回の大学訪問で一番、有意義な時間だったと思う。英語を使って行うディスカッションは瞬発力が鍛えられたと思う。日本では日本人の学生同士で行うことはあっても、ネイティブの学生と行う機会はほとんどない。現地の学生が日本のどんなことを知りたいと思っているのかが分かり、時折、冗談も交えながら会話できたことで親交が深まったと感じた。[K3a]
(4.23) 情報を英語で正確に伝えるということがとても難しかった。米国と日本の違いをある程度把握していなければ、彼らに伝わりやすい回答をできないのではないかと考え、米国の教育について調べた。おかげで日本と米国のことについて改めて調べることができた。[L2]

4. 3 授業見学の省察

現地では主に日本語の授業と日本文化・社会に関する授業を見学した。日本語の授業については、米国で外国語教育がどのように行われているかを知る機会となった。クラス人数、設備、教え方、学生の反応など、研修生には初めての参観となった。以下の(4.24)～(4.28)が彼らの感想である。

- (4.24) 日本語をどのように教えているのか全く知らなかったの、興味深かった。日本語の先生が皆日本人であるということも、日本の大学では英語をほとんど日本人の先生が教えている点と大きく違うと感じた。日本語を学んでいる学生のレベルの高さにも驚かされた。[S4]
- (4.25) 全て日本語で行っているという点に一番驚いた。言語学習では学習する言語にできるだけ多く触れることが大切だと思う。そういった意味で、今回見学した授業は理にかなっている。教師の工夫もたくさん発見できた。[K3a]
- (4.26) 学習の熱心さに刺激を受けると共に、授業形式が日本で多い講義型(教師⇒生徒)とは対照的で、参加型(教師⇄生徒)で、発言、質問をいつでもできるのがとても魅力的だった。[N1]
- (4.27) 日本人が意識せず使っている文法や、文化・風習について授業をしていたので、教授法や授業項目は興味深く感じた。基本的には全て日本語で文法を説明しているが、ところどころで英語で説明しているのも興味深かった。[M1]
- (4.28) コミュニケーションの授業が非常に多い。言語はコミュニケーション抜きには学べないので、授業環境が整っていると感じた。[M1]

米国の学生の授業態度については、以下の(4.29)

- (4.30) のような感想が見られた。
- (4.29) 本当に刺激的だった。日本の大学生と比べて、勉強に対する意識が高いと強く感じた。寝ている学生、スマホをいじっている学生などはおらず、質問も積極的にしていて、予習、復習も熱心に行っている様子だった。[S4]
- (4.30) 日本では当たり前でも海外では珍しいと感じる考え方や行動がどんなものであるか学んだ。日本語の授業では、言葉のニュアンスや使い方の違いなど、私たちが通常使っている言葉が彼らにとって理解しにくいものであることが分かっておもしろかった。[L2]

この他、「日本の日本語教育では少人数や取り出し

教育しか見たことがなかったが、初めて大人数の授業を見ることができた[N1]」「日本にいなくてもイメージに近い教育ができてるのがいいと思った[N1]」「日本に留学したことが無いのに日本語をたくさん話せるのはびっくりした[S4]」等の感想も見られた。

4. 4 大学院生の助言の会の省察

現地の大学院生からは、研修生1、2年生の2名のプレゼンテーションに対するコメントや助言が出された。その主な内容は、「限られた時間内に興味深い内容が紹介され、その点ではうまくできていると思う」「スライドや動画の工夫がされて分かりやすい」等である。一方、「テーマを絞ってもう少し内容を深めてもいいのではないか」「聞いている人も一緒にプレゼンテーションをしているような気持ちになれるような方法を目指していく必要があるのではないか」等の指摘があった。すなわち、次のステップとして、聞き手をどのように取り込むかが課題となった。

今回のプレゼンテーション全体を通じて、研修生は同じような印象をもった。すなわち、聞き手とのインタラクションをどのように増やしていくかである。目標を達成するには、もちろん語学力やさらなる研修や準備が必要だと感じた研修生は多く、「プレゼンも話題を提供するような内容にして、それについてプレゼンテーションの後に話すようなインタラクションができるようにしたい[M1]」という感想も見られた。この活動に対して、1人の研修生は、「日本人院生の人から有益なコメントをもらえたので、今後より日本に興味を持ってもらえそうなプレゼンテーションを作れると思う[L2]」と述べている。

5. 成果と課題

省察レポートの記述を分析した結果、研修生はこの短期研修プログラム全体の活動から様々なことを学んだことが明らかになった。

プレゼンテーションの作成を通じて、研修生は日本のことを発信するのには、まず自分自身が日本について知らなければならぬことに気づいた。そして、日本について調べ、日本独自の文化に目を向け、改めて日本の文化の良さを認識した。また、発表することで、米国での日本の認知度や外国人の視線で捉えられた日本、米国の大学生の視点から見た日本の姿に触れる機会を得た。これだけで研修生の日本発信力が上がったとは言いがたいが、日本文化等を発信する基礎となる日本の捉え方について、少なからず刺激を受けたと言う点では、研修成果があったと考えられる。

また、プレゼンテーションは英語と日本語を使って行ったが、省察レポートの分析から、研修生はどちらの言語を使用した場合も聞き手がどの程度理解して

いるか等の不安を感じていたことが明らかになった。英語の場合は自分の英語力への不安、日本語の場合は聞き手の日本語力に合っているかという不安である。これらの不安は、聞き手の反応によりある程度解消されたが、コミュニケーションを行う際には、相手の語学力や知識の度合い等を考慮してプレゼンテーションを作成する必要性を研修生は深く認識した。

研修生は現地の大学院生から聞き手を取り込むようなプレゼンテーションや聞き手とのインタラクションが大切であるという助言を受けた。研修生は実際にプレゼンテーションを行ってみて、聞き手の反応や質問から多くのことを学べることを実感し、発信からも多くのことを学べることに気づいた。そして、聞き手を取り込むにはどうするか等、プレゼンテーションのレベルアップに向けて次の目標を明確にすることができた。

ディスカッションでは、予め提示された質問から研修生は米国の学生の興味・関心についてある程度知ることができた。そして、それらに適確に答えるには、日本だけでなく、米国についても調べなければならないことに気づかされた。ディスカッションは、米国の学生の考え方、討論の進め方、意識の違い等を僅かではある知る機会となった。ここでは、一種の異文化間コミュニケーション体験ができたのではないかと考えられる。

英語運用の面では、研修生は積極的に英語を使ってコミュニケーションする姿勢の大切さを認識し、そのために更に英語力向上に努める必要性を痛感した。正確な情報を伝えるためにしっかり勉強をするべきだった、原稿をネイティブチェックしてもらった等の反省も出た。この研修だけで英語力が上がったわけではないが、米国の学生の前で発表した体験や自信等が今後の英語学習の新しい方向性や学習意欲の向上に影響を与えたと考えられる。

現地の日本語の授業見学は、大学の授業の様子に触れる機会となった。研修生は、主に日本語で授業が行われていること、日本人教師が多いこと、講義ではなく参加型の授業であること、コミュニケーションを主体とした教室活動が中心であること、日本の外国語（主に英語）教育とかなり異なること等を学んだ。現地の学生が授業中真剣に取り組んでいる姿に感銘した研修生も多い。また、大学の施設、活動見学、知り合った学生・院生、教員との交流を通じて、研修生は米国の大学事情の一端を垣間見ることができたと考えられる。

6. むすび

本研修全体を通じて、研修生は日本独自の文化を再認識し、聞き手を取り込むプレゼンテーションの重要性を学び、グループ・ディスカッションでは異文化コ

ミュニケーションを体験し、現地の大学の授業の様子や学習姿勢に関する理解を深め、自分から発信すれば聞き手の反応から多くのことを学べること等に気づいたことが明らかになった。この短期研修だけで発信力や英語運用力が特段高まったとは言えないが、異文化体験を通じて、海外の文化への興味・関心を高め、コミュニケーションの方法や価値観の相違等に関する様々な気づきを促したという点では成果があったのではないかと考えられる。発信力や英語力の養成には更なる研修や体験が必要であり、それらを実現できるような研修プログラムの開発を今後の課題としたい。

注

- 1 省察レポート中の研修生の識別記号。
- 2 この学生は他大学の学生で本プログラムの補助金は受けていないが、研修には参加した。以下、研修生として本稿では扱う。
- 3 研修の全日程はロサンゼルスにて3日間の社会見学研修を含め、全2週間である。

謝辞

本研修は2014年度海外短期派遣プログラムの「米国パデュー大学への短期派遣」として愛知教育大学より助成を受けました。プログラムの実施にあたってご支援いただいた学長、国際交流センター長、及び、事務関係者の方々に感謝の意を表します。また、今回の研修プログラムを進めるにあたっては、派遣先大学の深田淳教授をはじめ、スタッフの方々、大学院生の方々には、受け入れからプログラムの立案、実施に至るまで、様々な方面からご協力とご支援を賜りました。教員、研修生一同、心よりお礼申し上げます。最後に、本稿をまとめるにあたっては、3名の匿名の査読者の方々より、ご意見、ご指導を賜りました。筆者の力不足から、ご助言等を十分には活かせませんでしたが、多くのことを学ぶ貴重な機会となりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

資料：インタビューの質問（一部）

【Topic 1 : Japanese Education】

1. *What do you learn during elementary, middle and high school?*
2. *How stressful is the Japanese education system?*
3. *How is English taught in Japan? What do you think would make the English learning experience better?*
4. *Do you think the new English education policies ahead of the Tokyo 2020 Olympics will have any effect?*

5. *How much has the school education system changed since you were child and since your parents were in school?*
6. *Is there anything you think that gives kids an advantage if they go to a prestigious school? How equal is Japanese education system between the prestigious and non- prestigious schools?*
7. *What opportunities do children have to express their creativity? Are there any special art schools?*

【Topic 2 : Mainstream Media】

1. *Which mainstream media influences you the most? Is it TV, radio, newspapers, etc.? Referring back to this media, what information do you get from this source?*
2. *What is considered to be mainstream/popular culture for college students in Japan today?*
3. *In your opinion, what kind of traits allow something to become popular in Japan?*
4. *What is in Japan's media that is not found in other country's media, that is to say, what makes Japanese media unique?*

参考文献

- 池田庸子(2011).「海外留学の意義とメリットを考えるー海外留学によって何か得られるか」ウェブマガジン『留学交流』4.
- 稲葉みどり (2005).「米国における教育実習プログラムの成果と充実の方策」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』8, 23-30.
- 柿本せつ子(2012).「海外研修を言語教育に生かすには一言語の中の文化を再考する」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』14, 61-68.
- 河合淳子(2011).「大学における学部生の留学促進」ウェブマガジン『留学交流』2.
- 木村啓子(2011).「海外研修プログラムの効果と役割」ウェブマガジン『留学交流』9
- 工藤和宏(2009).「日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果ーグラウンデット・セオリー・アプローチに基づく一考察」『スピーチコミュニケーション教育』22, 117-139.
- 工藤和宏(2011).「短期海外研修プログラムの教育的効果とはー再考と提言」ウェブマガジン『留学交流』9.
- 田中真奈美(2011).「日本人大学生の短期海外留学の教育的効果の分析」『東京未来大学科学研究費補助金成果報告書ー幼児・児童における未来型能力育成システムならびに指導者教育システムの開発』第6章第2節.
- 友岡 賛(2011).「慶應義塾における派遣留学」ウェブマガジン『留学交流』2.
- 中川典子(2009).「短期海外語学研修における参加者の気づきー異文化理解教育の観点から」『流通科学大学論集ー人間・社会・自然編』21(2), 37-

60. 松尾正人(2011).「日本の学生をできるだけ多く国外に出そうー九州大学のカリフォルニア英語研修の紹介」ウェブマガジン『留学交流』8.
- 松本 勉(2011).「熊本高専におけるグローバル人材の育成ー海外教育研修旅行と授業への英語導入」ウェブマガジン『留学交流』9.
- 山口京子(2011).「留学交流の活性化に向けてー短期留学と長期留学、ICU の場合」ウェブマガジン『留学交流』9.

-
- 1 省察レポート中の研修生の識別記号。
 - 2 この学生は他大学の学生で本プログラムの補助金は受けていないが、研修には参加した。以下、研修生として本稿では扱う。
 - 3 研修の全日程はロサンゼルスにて3日間の社会見学研修を含め、全2週間である。